B 年特定16　ヨハネ6章60―69節

［直訳］

60 そこで多くの者が　聞いて　彼の弟子たちからの　言った、
「ひどい　ある　この話は。
誰が　できるか　彼に　聞くことが。」

61 だが知って　イエスは　自身のうちで　次のことを
つぶやいている　このことについて　彼の弟子たちが
言った　彼らに、
「このことが　あなたたちを　つまずかせるのか。

62 それではもし　あなたたちが見るなら
人の子が上るのを　ところへ　彼がいた　以前。

63 霊で　ある　命を与えるものは、
肉は　役に立たない　何にも。
言葉は　ところの　私が　話しておいた　あなたたちに
霊で　ある　そして　命で　ある。

64 しかし　いる　あなたたちからの　ある者たちが　ところの　信じない。」
なぜなら知っていた　初めから　イエスは
誰が　あるか　信じていない者たちで
そして　誰が　あるか　彼を引き渡そうとする者で。

65 そして　彼は言っていた、
「このために　私は言ってある　あなたたちに　次のことを
誰もできない　来ることが　私のもとに
もし　それが与えられていないなら　彼に　父から。」

66 このことから　多くの者が　彼の弟子たち［から］の
離れた　後ろのほうへ
そして　彼と共に　もはや歩き続けなかった。

67 そこで言った　イエスは　十二人に、
「ない　あなたたちも　望むか　去って行くことを」

68 答えた　彼に　シモン　ペトロは、
「主よ、　誰のもとに　私たちは離れるでしょう
永遠の命の言葉を　あなたは持っている、

69 そして　私たちは　信じている
そして　私たちは知っている　次のことを
あなたが　ある　神の聖なる者で。」

［新共同訳］

60 ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」61 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。62 それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。63 命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。64 しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。65 そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

66 このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。67 そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。68 シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

①構成

ⓐ 60 節

多くの弟子は「誰が」イエスの言葉を聞けるかと考える。ここでの「聞く」は「聞いて受け入れる」の意味である。

ⓑ 61―65 節

㋐イエスは弟子のつぶやきを「自身のうちで」知っている。この「自身のうちで」は「誰にも教えられなかったが、イエスは知って」の意味であり、イエスの超自然的な能力を表す表現である。64 節でもイエスが「初めから知っていた」ことが言及されている。

㋑ 62 節は帰結文を欠いた条件文だけの文章である。補うべき帰結文は、「つまずきはいっそう大きくなるだろう」とも考えられるし、「つまずきは解消されるだろう」とすることもできる。人の子が以前いたところに上るという出来事も、「肉」の目で見る者には分からずに終わるが、信じる者は「霊」の中でそれを見る。

㋒ 64 節でイエスは「信じない者がいる」と述べるが、これは信じようとする人に水をさすためではない。弟子の間に分裂ができてしまうことをイエスは知っている。

ⓒ 66 節

多くの弟子が離れてゆく。「歩き続ける」と訳したのは、動作の継続を表す未完了過去形だからである。

ⓓ 67―69 節

離れてゆく弟子とは違って、ペトロは「誰のもとに離れるでしょう」と信仰を述べる。69 節の「私たち」は強調である。

②イエスにつまずく弟子（60 節）

ⓐ 41―42 節ではユダヤ人がつぶやいたが、ここでは弟子が「この話はひどい」と言ってつぶやき始める。「ひどい」と直訳した語スクレーロスは、文字通りには、手触りが「固い・粗い」の意

味だが、新約聖書ではもっぱら転義した意味で使われる。この語には「耳障りな・不快な・耐え難い」という意味があるが、ここでは「理解し難い・受け入れられない」を意味する。イエスの言葉は、多くの弟子には聞くに耐えない「ひどい」話である。「聞く」という動詞アクーオーが二度用いられているが、最初の「聞いて」は単に「耳にする・聞く」の意味だが、「聞くこと（ができるか）」は「聞いて従う・受け入れる」の意味である。

ⓑイエスの弟子には、イエスのごく近くにいて従うグループのほかに（六 1―21）、イエスに従いきれていないグループも存在している。ヨハネがこのように書くのは、福音書の読者が直面している状況をここに投影させたかったからだろう。一世紀末のヨハネの教会は内部分裂の危機をはらんでいた。

③イエスの言葉（61―65 節）

ⓐ「このことがあなたたちをつまずかせるのか」とイエスは問いかける。「つまずかせる」と訳した動詞スカンダリゾーには「怒らせる・憤慨させる・いらだたせる」の意味もあり、この意味に取る者もいる。しかし、この動詞の元来の意味は「罠に落とす・罪を犯させる」である。イエスの言葉がかえって彼らに罪を犯させる、つまり不信仰に陥らせる原因となってしまう。イエスは好んでつまずきとなるのではない。むしろ、信じる者がそれを克服できるようにと手助けする（62―63 節）。だが、信じられない者にとっては、ますます混乱がひどくなり、手に負えない問題にぶつかってゆくことになる。

ⓑ弟子がつぶやいた原因は、62 節に「人の子が上るのを見るなら」とあるので、イエスが「私は天から降って来た」と説いたことにあるだろう。「人の子」は天の故郷から降って来たのだが、彼らはそれが信じられない。62 節でイエスは「天に上る」とは言わずに、「以前いたところに上る」と言う。天は「以前いたところ」であり、天こそがイエスの故郷なのである。

ⓒイエスの言葉を理解するためには「肉」は役に立たない。弟子がイエスの言葉につまずくのは、「肉の目」から離れられないからである。「肉」とは神との関わりを欠き、人間にすぎない自分の思いに固執する人間のことである。だが、神の霊に導かれて、イエスの言葉を聞くなら、それを信じることができる。そのとき、霊であり命であるイエスの言葉は、神からの「いのち」を地にもたらし、肉である人間を生かす。

ⓓ65 節の「私は言ってある」は完了形である。イエスはすでに「もし父から彼にそれが与えられていないなら、誰も私のもとに来ることができない」と語っている。この言葉は、6 章 44 節「もし私を遣わした父が彼を引き寄せないなら、誰も私のもとに来ることができない」を指している。ここでは「与える」の受動形が用いられているが、「与える」はヨハネ福音書では神の恵みを表す特有の表現である（三 27、一九 11）。

④弟子の離反（66 節）

ⓐ61―65 節のイエスの説得にもかかわらず、多くの弟子が「後ろの方へ離れた」。彼らは背を向けて離れていき、「イエスと共にもはや歩き続けなかった」。「歩く」は「生きる」と同じ意味で用いられることがあり、「イエスと共に歩く」は弟子としてイエスに従う生き方を表す。イエスが弟子を招いて、霊によって生かされる世界を示すまさにそのとき、多くの弟子が「肉」というあり方へ引き返してしまう。

ⓑ弟子たちがイエスから離れるのは、外から来る迫害のためではない。イエスの言葉が理解できな

いという、彼らの内側にある頑なさのためである。彼らは「肉」にとどまり、自分の知識に閉じこもる。だから、イエスの言葉が聞き取れない。「後ろの方へ」はそのようなあり方を示している。人の子を信じる者は心の目を開かれるが、信じない者の心の目は閉ざされたままである。

⑤十二弟子との問答（67―69 節）

ⓐイエスは「あなたたちも去って行くことを望むのか」と十二人に語りかける。「ない」を用いる疑問文は「いいえ、望みません」という否定の答えを期待する疑問文である。訳す際には「ない」は省かれる。イエスは十二人を試しているのではなく、信仰へと招いている。人称代名詞が用いられ、「あなたたち」が強調されている。

ⓑこの問いにペトロは答えて、「誰のもとに私たちは離れるでしょう」と述べ、さらに「私たちは信じている、そして知っている」と信仰を告白する。この告白でも「私たち」が強調され、イエスに従う決意が表明されている。「信じている」と「知っている」は組み合わされて一つになり、信仰を選ぶ確かな態度を言い表している。ヨハネが述べる「知る」は知識とは別のものであり、人格的な繋がり（一〇14―15）、キリストや神との交わり（一七 3）を含んでいる。「知る」は、ここでは、信仰に含まれる内的な確信を表現するために補われている。

ⓒ「離れる」はアペルコマイである。この語は前置詞アポ（から離れて）と動詞エルコマイ（来る・行く）との合成動詞であり、「離れる・離れて行く」が基本の意味である。66 節の「後ろの方へ離れる」は、「私のもとへ来る」（35・37・44・45・65 節）とは反対に、イエスを信じられずに、背を向ける多くの弟子たちの行動を表すのに使われる。これとは対照的に、68 節では、十二人を代表して、ペトロが「主よ、誰のもとに私たちは離れるでしょう」と言い、「あなたが神の聖なる者である」と言って、イエスへの信仰を告白する。この「あなた」も強調である。

ⓓ「聖」とは神の最も深い本質に参与したことを表す言葉であるから、イエスは神に由来する特別な存在であると十二人は信じたのである。もちろん、この場面での十二人がイエスを完全に理解し尽くしたというのではないだろう。しかし信じることによって、霊に生かされる世界へとイエスと共に歩き続けようと決心したのである。

⑥イエスと共に歩み続ける

ⓐイエスの話を聞いてつぶやき、離れていった弟子たちと、イエスの言葉を理解するために、あくまでイエスに従う弟子たちがいる。イエスを離れた弟子と従った弟子の相違は、イエスの由来をどう見るかにある。「肉」の目で見れば、イエスはヨセフの息子であり、ガリラヤで育ち、十字架に死んだ人物でしかなく、追いかけるべき対象ではない。しかし「霊」の目で見る者は、イエスの真の生まれに気づいており、十字架の死に「以前いたところに上る」イエスを見る。

ⓑペトロがイエスは「永遠の命の言葉を持っている」と告白する根拠はただ一つしかない。63 節に「私があなたたちに話しておいた言葉」とあるように、それがイエスの語った言葉だからである。信じてイエスの言葉に留まり（八 31）、その言葉を保ち（一四 23）、聖霊によってさらに深く真理へ導かれようとするとき（一四 26）、「いのち」に生き始めている。

ⓒ天から降り、天へと上るイエスだけが神を見ている。イエスを「神の聖者」と信じ、イエスとの交わりに生きる者は、自分の目で見ることのできる世界ではなく、「霊」の目が見させてくれる世界を求めて生きる。信仰とは、自分には見えない世界があることを認めて、その世界を見ることを願い、イエスと共に歩み続けることである。